

## Interview

### もっと気楽に向き合えば 好きのツボが鍛えられますよ



写真：志田三穂子

絵本評論家  
広松由希子

#### 「怖い本」に なんとも言えない感情が耕された

母が本全般が好きだったこともあり、幼い頃から本に囲まれた生活をしていました。兄がいたので生まれた時から絵本もたくさんありましたが、母が私のために初めて買ってくれたのが「うさこちゃん」のシリーズ。1歳でした。「うさこちゃんとうみ」がとくに好きで、何度も読んでもらったそうです。大人になって娘に読んだ時、自分の中に残っていた絵と言葉がよみがえり、細胞一つひとつが喜んでるように感じられました。

怖い本の記憶もあります。2、3歳の頃に読んだ「うさぎのみみはなぜながい」というメキシコ・アステカ

の民話です。か弱いうさぎが「私のからだを大きくしてください」と神様に願ったところ、「とらとわにとさるの皮を持ってきたら叶えてやる」と。うさぎは知恵を絞り、けものを次々と倒して皮を神様のもとへ持っていくのですが、結局願いは叶えてもらえず、しまいには「おまえは賢すぎるから大きくしてはいけない」と耳だけを長くされてしまうのです。神の絶大な力と理不尽な結末に、当時恐怖と共になんとも言えない感情が耕されました。きれいで正しいばかりが絵本ではないですね。

5歳の頃、親の仕事の都合でアメリカに引っ越したのですが、地元の幼稚園でなかなか友達ができず、寂しい思いをしていたときに母が読んでくれたのが「わたしとあそんで」でした。小さな女の子が原っぱで虫や動物

に「あそんで」と声をかけて手を伸ばすと、みんな離れていってしまう……。女の子が一人じっとしていると一匹また一匹と戻ってきて、最後はみんな仲良くなる話です。当時は自分の状況と重なり、身につまされて読む気になれませんでした。でも20代後半になってふと読み返した時、ひっかかっていたものが一気に溶けたようでした。全ページ、最初から最後までお日様が描かれ、微笑みながら彼女をずっと見守っていたのです。5歳の自分にも温かい光が注がれていたんだと。

#### 絵本の善し悪しに縛られず 楽しむことが大事

子どもがすぐ飛びつくようなわかりやすい絵本ばかりじゃ



「うさぎのみみはなぜながい」北川民次 文・絵（福音館書店）を通して、怖さやそれ以外の感情が耕された。

広松さんが大学時代に出会い、絵本関連の仕事を目指すきっかけとなった「かしのピル」ウィリアム・ニコルソン 作・絵／松岡享子、吉田新一 訳（ペンギン社）。「娘も大好きで、子育て中もお世話になりました」

なくていい。すぐに反応が見えなくても、心に種をまくような一冊があってもいいんだと、この本から教わりました。何年後かに芽を出すかもしれないし、出さなくても、思いを込めて選べばいい。以来、仕事で本を選ぶ時も「種まきの本」の存在も意識するようになりました。

子育て中のママパパは「子どもにとって良い本を読まなければ」と、良書にこだわりすぎでは？でも絵本の善し悪しなんて厳密なものではなく、仮に悪い本を読んだとしても、それでおさんが非行に走るわけでもない。それよりも大人もいっしょに楽しむことが大事。「これ美味しいよ」と勤めると、相手にも美味しさが伝わるように、ぜひワクワクした気分です。子どもにもママパパの気持ち伝わりやすから。

### 広松由希子

編集者、ちひろ美術館学芸部長などを経て、現在フリーランスで絵本の文、評論、翻訳、展示、講座や絵本コンベンション審査員などで活躍中。ポロニャ展やBIBなどの国際審査員を歴任。著作に「日本の絵本100年100人100冊」（玉川大学出版部）他多数。朝日新聞「子どもの本棚」などで新刊絵本の選評を連載中。



（右）アメリカ時代にきょうだいで楽しんだ「Nutshell Library」（Maurice Sendak作）。  
（左）大人になり、絵に込められた深い思いに気づくことができた「わたしとあそんで」マリー・ホール・エツ 文・絵／よだじゅんいち 訳（福音館書店）。



イタリアで毎年開催される「ポロニャ国際児童図書展」にて。日本の絵本の魅力を発信する広松さん。

スロバキアで開催された「ブラチスラバ世界絵本原画展」（BIB）では審査員を務めた。一枚一枚、原画を審査している様子。

#### 海外の本はフォーマットが多彩

仕事柄、海外の絵本に触れる機会も多いです。日本の絵本が他国と決定的に違うのは、日本には縦書きと横書き、右開きと左開きの流れの異なる本があることです（海外の絵本はほぼ100%横書きです）。縦と横、文字の組み方に合った絵の流れによって印象がずいぶん変わるため、作り手もそのあたりを上手く使い分けています。印刷の技術も優れていますね。ただ、ページ数や形状といったフォーマットは画一的で、比較的行儀が現れる。

一方世界を見渡すと、分厚い絵本からものすごく大きな絵本、六角形やセリフのない絵本まで、とにかくフォーマットが自由！ また哲学的な内容だったり、アート性の高いデザイン

だったり、大人もたっぷり楽しめる絵本が数多く存在します。欧米はもちろん、最近は中国や韓国などアジア圏もすごく元気。手に取るたびに感性が刺激され、絵本の概念を変えてくれる作品もあります。

今やネット社会で気になる情報は瞬時に飛び込んできます。絵本も同様で、話題の本、人気の本の情報も容易に得ることができると。ただ、自分の好みの範囲のものだけでなく視野を広げ、ちょっと視点を変えれば、想像もしていなかったような絵本に出合うこともあります。「理由はわからないけれど、なんだか気になる」と思う一冊があったら、ぜひお子さんとページをめくってみてください。筋トレと同じで、好きのツボは読めば読むほど鍛えられますよ。

- 1) 「Tener un patito es útil」 ISOL作（アルゼンチン）：ジャバラになっていて片面は男の子視点、もう片面はアヒル視点でストーリーが展開。
- 2) 「Mic et Mac」 NADJA作（フランス）：小人のミックとマックの話。豆本だが、チョコレーのように美しくパッケージされ、さすがアートの国！
- 3) 「우리는 지금도 친구일까?」 チョ・ウンヨン作（韓国）：ピンクのイカが印象的。細長い形状。背表紙をつけず、あえて糸綴りだけにしていて洒落ている。
- 4) 「Pinóquio」 Alexandre Rampazo作（ブラジル）：ピノキオが「男の子になりたい」と願うたびに鼻が伸びていく。折り込まれたページをすべて開くと、独創的な夢のような絵が現れる。
- 5) 「Bienvenida」 Marta Comin作（スペイン）：折りたたまれた紙を広げると、うさぎやかめが現れる。ほとんど着色せず白一色の世界観に、逆に想像力が膨らむ。
- 6) 「Le Ruban」 Adrien Parlange作（フランス）：本の下についた黄色いスピンを引き出すと、新体操のリボンや靴紐など、絵柄の一部となって次々と変化。
- 7) 「Рукавичка」 Agrafka作（ウクライナ）：日本でも有名なウクライナ民話「てぶくる」を現代風にアレンジ。ふわふわのケースに思わず触れたいくなる。
- 8) 「DIE NIMMTES-NIMMTES-FRAU」 Květa Pacovská作（チェコ）：ページをめくると金や銀の箔押しや飛び出すしかけなど、楽しいサプライズが盛りだくさん。
- 9) 「Beasts of India」 Kanchana Ami, Gita 編（インド）：手漉きの紙、シルクスクリーン印刷、手製本によるハンドメイド絵本。インド各地の民族画に魅せられる。
- 10) 「ちぎゅうパスポート」 (BL出版) 広松由希子編（日本）：国内外24人の絵本作家が描く国境のない想像の国。それぞれの国がジャバラでつながりかけている。
- 11) 「雲ひとつ」 (GALLERY KOMAGATA) 駒形克巳作（日本）：世界の絵本作家に影響を与えた、しなやかなデザインで1ページごと、色々な質感の白い紙に、色々な形の雲を型抜きで表現。
- 12) 「Hyde & Seek」 JIMIN KIM作（韓国）：真っ黒な表紙の中央に、こちらを見つめる男の子。ちょっと怖い？ 中は穴の空いた複雑なジャバラ絵本で心を揺さぶられる。

## 感性を刺激する世界の絵本

世界には型にハマらない自由な発想の素敵な絵本がたくさん！  
広松さんの本棚から、ほんの一部をご紹介します。

